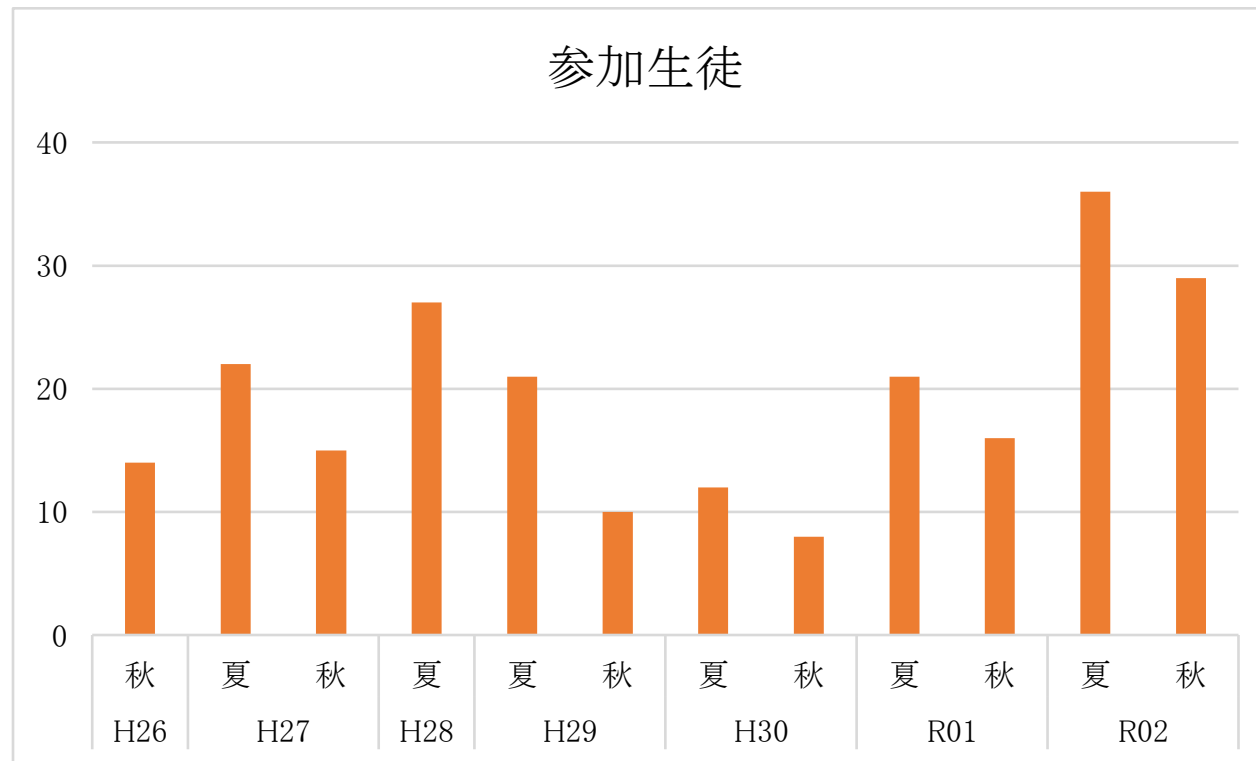


# 相生中島上流湿地魚類調査

---

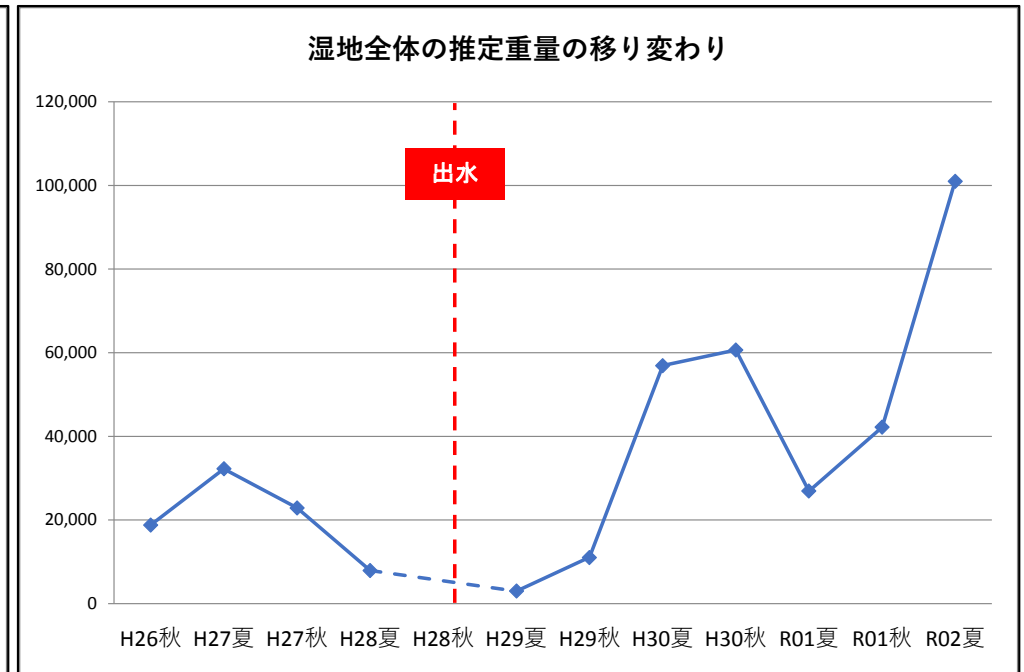
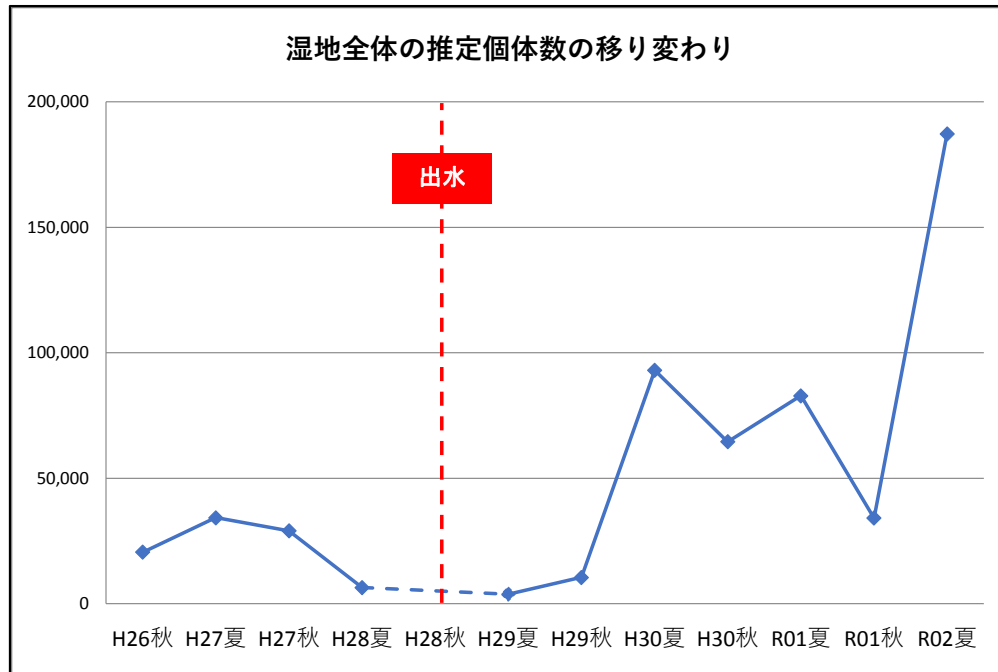
推定個体数・重量の増加について

## 相生中島上流湿地での魚類調査の概要



平成26年の秋から調査を開始し、今年で7年目の実施となる。  
今年度は例年に比べて多くの生徒に参加してもらい、出水後は土砂が溜まり足元が悪い中、貴重なデータ採取に協力してもらっている。

## 増加の理由について考えられること



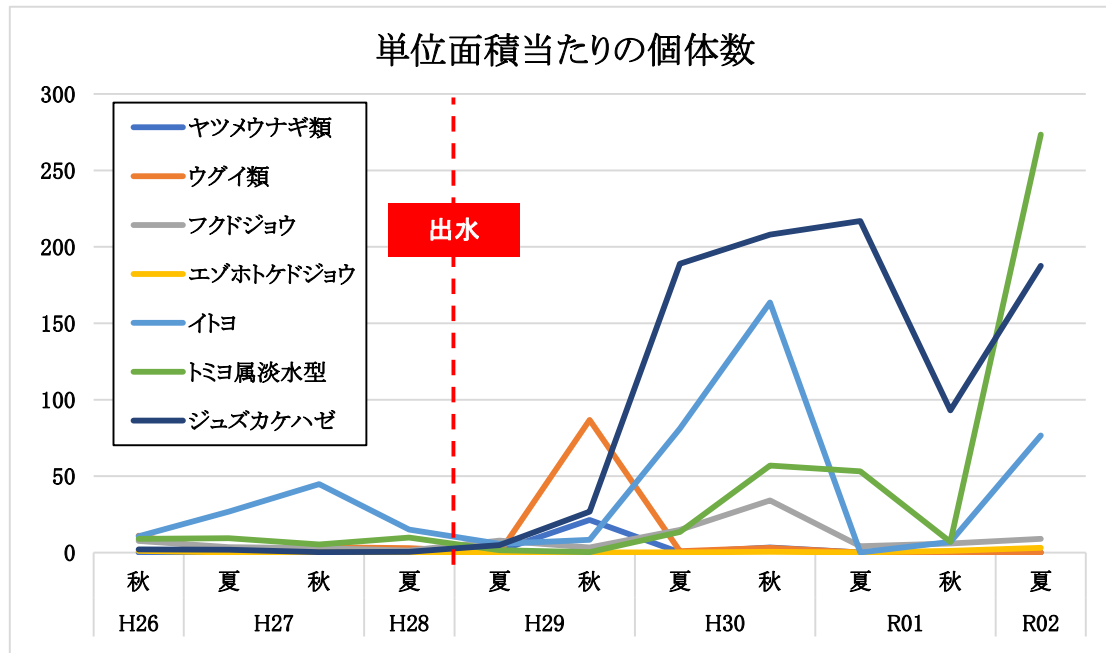
- 平成30年から令和1年を見ると、個体数は夏期の方が多く、重量は秋期の方が重い  
→夏期は生まれたばかりの幼魚が多く捕獲されており、秋期にはその幼魚が淘汰され生き残って生長した個体が捕獲されていると考えられる
- 平成29年から令和2年までの夏期調査を比べると個体数・重量ともに増加傾向にある  
→出水による栄養の流入と堆積土砂掘削によって溜まっていた栄養が拡散され行き渡り、生産量が増えてきている可能性が考えられる
- 平成28年の出水以降は、出水前と比べて個体数・重量ともに増加している

# 平成28年の出水により変化したこと

## 1. 水域環境の変化

- 底質は礫・砂利から大量の土砂が流れ込み砂泥へ
- 岸際植生はガマの群落が発達し生育している
- 水中には藻類が増加した など

## 2. 優占魚種の変化



令和2年夏期調査結果

種名	中央部	岸際部	計
	個体数	個体数	個体数
ヤツメウナギ類	0	0	0
ウグイ類	0	0	0
フクドジョウ	18	0	18
エゾホトケドジョウ	0	6	6
イトヨ	139	14	153
トミヨ属淡水型	13	534	547
ジュズカケハゼ	338	37	375

R02年夏期調査で個体数の多かったの3魚種に対する、出水による影響はあるのか

## R02年夏期調査で個体数が多かった3魚種への出水による変化の影響



- イトヨ (R02夏期調査捕獲数：中央部139尾 岸際部14尾)

グラフからは増減が激しく傾向があまり見られないが、流れの穏やかな砂泥底で産卵を行うため、適した環境になっているのではないかと。



- トミヨ属淡水型 (R02夏期調査捕獲数：中央部13尾 岸際部534尾)

産卵は水草の根元などで行うため、水際に生育しているガマ群落の発達により産卵がしやすく良い環境となっているのではないかと。



- ジュズカケハゼ (R02夏期調査捕獲数：中央部338尾 岸際部37尾)

出水以前は個体数は少量だったが、出水によって水が流れ込んだことで湿地に入り込んだのではないかと。

底質が泥の場所を好むため、良い環境となっているのではないかと。

出水による環境の変化や藻類などのエサの増加が、  
個体数や重量の増加につながったのではないかと